

慶長・元和期の

西脇 康

後藤庄三郎宛来状写『朶雲箋帖』(1)

一 はじめに

ここで紹介する史料『朶雲箋帖』は、金座一三代目の頭人後藤三右衛門光亨の子孫宅に伝来した書画類調査のなかから、友人の桜井弘人氏が二〇〇九年に発見され、筆者に提供され所見を求められた史料である。

標題として命名された名称のうち、「朶雲」とは、中国の唐時代の韋陟が五色に彩られた書簡箋を常用し、本文を侍妾に書かせ、署名だけを自分で認めて、「陟の字はまるで五朶雲（垂れ下がった五色の雲）のようだ」と言ったとする、『唐書』韋陟伝の故事から転じて、他人を敬ってその手紙をいう語となったとするのが大方の国語辞典の解説である。また「箋」とは、書き付け用の細長い紙片・手紙・札をさす。あるいは木・竹・象牙などで作り、書名などを記して経巻を包む帙篋のひもや卷子本の軸に結びつけたり、書籍中に挿入したりして検索に用いる札をさすとされる。いわば高貴な方々の書状帳という美称なのである。

現品は上下二巻仕立て表具がなされており、その軸装された全体の寸法は、上巻が縦二〇・五cm、横二二・四cm、下巻が縦二〇・五cm、横二〇・四・六cmである。巻末には、一八四四年（天保一五）三月一五日の完成と記される。

この卷子には、上巻に一八通、下巻に二一通、合計三九通の後藤庄三郎宛来状写（一部書状の宛所を欠く）が収録される。庄三郎とは、徳川家康の側近として仕え、金座の初代頭人となった後藤光次の通称である。

以下に、その翻刻文を掲げたい。なお、原本はすべて奉書の横折紙と推測され、書式は原本を模したが、改行は(一)で示し、文字の表記は新字体を基本とし、変体仮名・合字を現行の平仮名・片仮名に置き換え、著者による校訂にはすべて(一)を付した。

この史料は江戸初期の金座・大判座とその金貨の解明だけでなく、後藤光次の慶長期の幅広い政治活動を実証する研究には必要不可欠なものであるため、そのすべてを紹介しておきたい。

後藤光次は徳川家康の政治顧問（近習出頭人）として財政、金銀貨、諸国金銀山の管理、および欧州・東南アジアとの外交顧問として絶大な権力を振るい、それはのちの老中の権限をしのぐほどであったと評される。しかし、概説はともかく、その実証的な研究史となるときわめて乏しく、次のわずかに二点にすぎない。

・曾根総雄氏「後藤庄三郎考」

『東海史学』第一〇号、一九七五年東海大学史学会

・中田易直氏「後藤庄三郎の出自について」

『中央大学文学部紀要』史学科第二六号、一九八一年中央大学文学部

これとて、伝存史料が希有であるための現象であろう。以下、三段組みとして全文の翻刻文を掲げたい。